

## 特別寄稿

# わが心のふるさと 南アルプスの麓 (TBS 映画社だよりから)

NPO JAVCOM 元理事長 金丸幹夫

中央線の列車が甲府駅を離れ、西へ向かうとまもなく、左の車窓にひととき雄大な山脈が見えてくる。乗客は必ずと言っていいほど歓声をあげ、その偉容に目を奪われる。山に興味のない人でも、一体あれは何んという山だろう、と思わずにはいられないのである。

“南アルプス”

それは、深い谷と大きな尾根、深い樹林の連なりである。巨大な中に静かさと落ち着きを秘めた静止の山々である。

その南アルプスの中でも、王者として名実ともに岳人の憧れとなっている北岳、そして間の岳、農鳥岳は白根三山と呼ばれているが、この白根三山を起点として、自然が創り出した大きな扇状地帯が甲府盆地に向かって広がっている。その先端、山梨県中巨摩郡白根町（現：南アルプス市）が、私のふるさとである。

広大な南アルプスの自然を背景にして、明確に移り変わる四季と気象の中で、山猿のように駆けずりまわった子どもの頃の赤い頬っぺた、と言うより“赤ら顔”を想い起こしてグラスを傾ければ、それは秋の夜長に相応しい“ロマンの酒”となる。

今は、もう秋一感傷をそそるトワ・エ・モアの唄では“誰もいない海”となるが、海のないわがふるさとの秋は、あわただしい刈入れの季節である。梅雨どきの田植とならんで、一年中で最も忙しいときなのである。

“赤ら顔”の連中も、この頃は太い活躍する。朝早く、竹筒をつけた布袋を手し、朝露でとべない丸々と太った落穂のイナゴを

掴まえる。陽が昇りきる頃になると、ビクを手にして、田んぼの小穴をほじくり、ツボ（タニシ）を集める。

庭先に山と積むほど獲る。そして庭の土を掘り、それを埋める。このツボは、やがてくる冬まで土の中に保管されて、シジミ汁ならぬツボ汁となって、冬ごもりする。一家の活力源となるのである。

“オカアサーン！”一度は企画してみたイカナマルキのCMである。

百メ、大和、ハチヤ、ミズ、イチロウ……。種類の多い庭先の渋柿は枝がたわむほど実る。“赤ら顔”は小猿のように枝から枝へとび移っては顔や手足をすり傷だらけにして柿とりにハッスルする。

積み上げた庭先の柿山が夕陽を浴びて一層赤く映える頃、童謡のままに列をなしてアルプスの山にカラスが帰り、農夫たちも、又、家路を辿る。

この頃、“赤ら顔”は、もう別の仕事に精を出している。竹藪に群がって宿を探すスズメに小石をとばしたり、軒先に羽ばたくコウモリや、時折り低空飛行する季節はすれのフクロウに小砂利を投げつけたりするのである。とても武蔵や小次郎という訳にはいかないが、“赤レンジャー”の原型ぐらいにはなっていたのではないかと。夜なべ仕事の柿むきは、ファミリアなコミュニケーションの場でもある。ペクチンなど微塵もない、“田園茶菓子”コロ柿は、一家談笑の中で手づくりされる自然食なのである。“赤ら顔”は、いつしか爺さんの膝を枕に寝ついてしまう。時折り掻く手足の歴戦の、ミミズバシに母の目がとまる。

“サトウパンは傷にやさしいのです。サトウパンはやさしいママの心です”受賞したCMの類型がここにもある……。

庭先の落葉が強い夜風にあおられて音を

たて、ドングリの実が屋根瓦をたたき、秋の夜は更に深さを増す。

午前三時。吹き続けた晩秋の強風が静まると、爺さんは雑犬を連れ、夜明けの栗拾い、きのご狩りに出かける。“赤ら顔”は爺さんの「背負い子」の中で半分眠っている。爺さんは、南アルプスの麓、櫛形山に向かって黙々と歩き続ける。

おうさむ こさむ  
山から 雪んこが  
やってきたア

庭先に雪んこがのんびりとびかう頃になると、西の白根の山々をはじめ、南の富士山、北のハツ岳連峰もすっかり白化粧で装ってしまう。

午後二時から午前二時頃まで、きまって吹き続ける季節風“ハッ岳おろし”は、南アルプスの麓を渦を巻くように下りてきて甲府盆地の底に向かって吹きつける。まさに身にしみる、からっ風である。それでも、“赤ら顔”は平気の平佐。赤ら顔を尚赤くして、竹馬のり、タコあげ、松かさ拾い、ゴンギ（火つけ用の枯草）とり等々、それこそ風に向かってよく遊びよく働くのである。

そして夕暮どき。真赤に染まった白根を仰げば、幼な心にも大自然の雄大な美しさはある種の感動を与えずにはおかなかった。“いつか、あの山に登ってみよう…”今にして思えば、CM的叙情の画がそこにもあった。

秋から冬へかけての長かった“ハッ岳おろし”が静まると、富士の裾野を分けて南から“春一番”が吹きこむ。自然は大きく胎動してまたたく間に息吹く。

“赤ら顔”は芽生えた落のトウを集めてき



## わが心のふるさと 南アルプスの麓

せて飛び交う季節のくることを告げる。

“赤ら顔”は田んぼの水の口を塞ぎ、竹で編んだ“モジリ”を水の出口に仕掛けたり、毎晩、夕暮れどきから深夜にかけて、小川の“ヤナガケ”で楽しんだりする。ハヤ、ドジョウ、フナ、ヤマコ、ナマズ、ウナギなど、秋下りの淡水魚は、バケツやザルから溢れるほど獲れるのである。

台風が近ずき、この“ヤナガケ”で田んぼの小川が祭のように賑うようになると、もう秋はそこにきている。南アルプス山麓の緑も、日一日とその色合いを変えてゆくのである。

——私のふるさとには、ほんものの自然があった。

今はビニール・ハウスが乱立し、田んぼはブドウ園に変わった。“わがふるさと”は“心のふるさと”になってしまおうのだろうか？

今の“赤ら顔”たちは、どうしているのだろうか？

ともあれ、私にとって“わがふるさと”は、CM企画発想の一つの原点でもあり、心の中では常に変わらぬ姿を保ち続けているのである。



著者：金丸幹夫

日本大学芸術学部映画学科卒業

TBS 演出部でドラマインサートフィルムにドラマのTBS 8年間（株）TBS 映画社（TBS 100%出資）フィルム制作会社にてVTRが入りVTR-CMにハッスルする。業界ダントツのVTR-CM 制作者になる。

コマーシャル制作部長退職後にTBS関連プラスアルファ社を設立し、再出発。現在に至る。



てはカマドのオギ火にのせて、オヤジが好む酒のツマミに協力する。

そして農鳥岳の残雪が鳥の形に見える頃、楡形山麓から釜無川までの扇状地帯は一面の果樹の花で埋まり、まさに春たけなわとなる。ゆけどもゆけどもピンクに染まった桃畑。……今は都会っ子の観光ルートになってしまった。

果樹の花が桜の花にとって変わられ、そして若葉の色どりが濃くなって農家が稲作の準備を始めるまで、実に目まぐるしいばかりの季節の移り変わりである。“赤ら顔”が、庭先の田んぼで騒ぐ蛙の合唱にジッと耳を傾けたりするようになるのも、こんな季節の変わり目である。

刈り入れどきも及ばぬ多忙な田植が終ると、夕食後の田んぼの“水見”が“赤ら顔”の日課となる。

フランス人形劇の主人公の名前からジュディにパピイと名付けた二匹の雑犬をひきつれて“赤ら顔”は毎晩“水見”に出かける。釜無川をはさんで上下に果てしなく続くように思える夜の田園に、蛙の合唱をBGMにしてホタルが飛び交う情景は、ファンタスティックな自然のドラマを展開する。

——その夜も“赤ら顔”は“水見”のために畦道を急いでいた。と、突然、ものすごいなり声のような音と共に、畳二帖ほどの大きさの火の玉が、二つ、釜無川の水門から舞い上がったのである。火の玉は“赤ら顔”に向かって飛来してきた。吠えたりジュディとパピイ。狂ったように、二つの火の玉は、大きく、小さく巡回する。アッと思う間に、二つの火の玉は小川の上で撃突！一瞬、

打上げ花火のように光が散乱し、豪雨のような音をたてて落下……。

——それは、群をなして交尾する無数のホタルであった。川面に砂子をまいたように流れる青白い情景は、美しいというより凄絶であった。話には聞いていたものの、“自然の生命、”を目の当りにした“赤ら顔”は、生れて初めて腰をぬかしたものである。

南アルプスの山々の雪が消えはじめ、最後まで頑張った白根三山の雪も消えてしまうと、途端に激しい大陸性気候の夏がやってくる。カンカンと照りつける太陽は、盆地を灼熱の地と化してしまう。その暑さは想像を絶するものがあるが、“赤ら顔”は相変わらずである。釜無川で蛙のように泳ぐかと思えば、土手の蜂の巣を探り、蜂の子を集めて、爺さん、婆さんの栄養源にと努力する。足長、ブヨ、ときには地蜂にまで挑戦するため、この頃の“赤ら顔”は、いつも蜂にさされ顔は変形し、ひどい色合いを呈するようになる。

扇状地の果樹が色づき、ワセモモ、テンシンからはじまり、オオクボ、ハクトウまで、早朝の出荷に大変な賑いを見せるのもこの頃である。

戸を開け放した家の蚊帳に松虫がとりついて啼き叫び、夜風が冷たく感じられるようになると、もう夏は終りである。

はるか東方、笛吹川あたりの上空に連夜稲妻が音もなく光り、早くも、イナゴ、赤トンボ、イチモジセセリの大群が空をくら

